二〇一九年度

入学試験問題

国語

注意　・指示があるまで開いてはいけません。
・答えは解答用紙に書きなさい。
・本文は、問題作成上、表記を変えたり省略したりしたところがあります。
・記号がついているものはすべて記号で書き入れなさい。
・句読点や「　」も一字とします。
・試験中は横を向かないこと。早く終わっても周囲を見まわしたりしないこと。そのような場合には注意されることがあります。

一　次のカタカナを漢字に直しなさい。

(1)　夕日にソまる　(2)　ルス番をする　(3)　キコウ文を書く　(4)　テンラン会に行く　(5)　よい伝統をキズく　(6)　役員にリッコウホする

二　次の詩を読み、あとの問いに答えなさい。

祝婚（しゅくこん）

谷川俊太郎

男の若い首すじが
少しさびしげに見えるのはいい
いつのまにか男は男の父に似ている

女のⒶみはった瞳（ひとみ）が
少しいどむようなのはいい
いつのまにか女は女の母に似ている

街のいつものざわめきが
いつものようなのはいい
Ⓑ平凡（へいぼん）は平凡のままでドラマになろうとしている

樹々（きぎ）の梢（こずえ）が
今日三ミリ天へと伸（の）びたのはいい
誰（だれ）もそれに気づかなかったとしても

めでたいこの日にも
やはりどこかで人は死んでいる

愛しあうもののために
生れてくるもののために
彼（かれ）がこの世界を遺（のこ）してくれたのはいい

たとえそこに血が流れているとしても
たとえそこに石と空しかないとしても
今日ふたりは世界を受けとったのだ
てのひらにたたえた水のように
あやうく　しかもゆたかに

Ⓒ常ならぬこの地上で
ひとりひとりが誓（ちか）いあうのはいい
何にむかってかそれは知らずに

そしていつかこの日も
静かに暮れてゆくのはいい
初めての夜がくるのはいい

（谷川俊太郎『谷川俊太郎詩集』ハルキ文庫）

(1) 第一連と第二連に用いられている表現技法を答えなさい。

ア 擬人法　イ 対句　ウ 体言止め　エ 擬態語

(2) ――Ⓐ「みはった」とはどういう意味ですか。

ア 警戒して見た　イ 大きく開いた　ウ 夢中に見とれた　エ にらみつけた

(3) ――Ⓑ「平凡は平凡のままでドラマになろうとしている」とはどういうことですか。

ア いつもと変わらないはずの有形無形のすべてが、光り輝いて見えて至上の祝福を与えようとしている。

イ 町のざわめきが変わらないのは、どんな一日でも変わらないようにする幸せな二人の努力の結晶である。

ウ ドラマは愛のあふれる特別な行動の積み重ねによって、平凡な生活の中に隠されているものだ。

エ 幸せに見える平凡の中の何気ない変化にこそ、すべてをくつがえすような感傷的出来事が待っている。

(4) ――Ⓒ「常ならぬ」とはどういう意味ですか。

ア 必ず喜びがある　イ 常識に縛られた　ウ 心ない者が栄える　エ 何一つ絶対がない

(5) この詩を説明した次の文章について、あとの問いに答えなさい。

この詩は、男女が［Ⅰ］することを祝う詩である。［Ⅰ］することを、詩中では「めでたいこの日」と表現し、また［Ⅱ］とも表現している。

① ［Ⅰ］に入る語を考え、漢字二字で答えなさい。

② ［Ⅱ］に入る語を詩中から五字以上十字以内で書きぬきなさい。

三　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

一日が瞬く間に終わる。あるいは一年があっという間に過ぎる。子供の頃はもっともっと一年が長く、充実したものだったのに――。

なぜ大人になると時間が早く過ぎるようになるのか。誰もが感じるこの疑問は、ずっと古くからあるはずなのに、なかなか納得できる説明が見当たらない。この難問について生物学的に考察してみよう。

三歳の子供にとって、一年はこれまで生きてきた全人生の三分の一であるのに対し、三〇歳の大人にとっては三〇分の一だから――。

こんな言い方がある。よく聞く説明だが、はっきり言って、これは答えになっていない。確かに自分の年齢を分母にして一年を考えると、歳をとるにつれて一年の重みは相対的に小さくなる。しかし、だからと言って一年という時間が短く感じられる理由にはならない。

ここで重要なポイントは、私たちが時間の経過を「感じる」、そのメカニズムである。物理的な時間としての一年は、三歳のときも三〇歳のときも同じ長さである。にもかかわらず、私たちは三〇歳のときの一年のほうをずっと短いと感じる。

そもそもⒶ私たちは時間の経過をどのように把握するのだろうか。自分がこれまで生きてきた時間をⒷモノサシにして（あるいは分母にして）時間を計っているのだろうか。もしそうなら先の説明も一理あることになる。

でも、これは違う。私たちは自分の生きてきた時間、つまり年齢を、実感として把握してはいない。大多数の人は自分が「まだまだ若い」と思っているはずだし、一〇年前の出来事と二〇年前の出来事の「古さ」を区別することもできない。

もし記憶を喪失して、ある朝、目覚めたとしよう。あなたは自分の年齢を「実感」できるだろうか。自分が何歳なのかは、年号とか日付とか手帳といった外部の記憶をもとに初めて認識できることであって、Ⓒ時間に対する内発的な感覚は極めてあやふやなものでしかない。したがって、これが分母となって時間感覚が発生しているとは考え難い。

一年があっという間に過ぎる。時間経過の謎は、実は私たちの内部にある、この時間感覚のあいまいさと関連している、というのが私の仮説である。それはこういうことである。

今、私が完全に外界から隔離された部屋で生活するとしよう。この部屋には窓がなく、日の出日の入り、昼夜の区別がつかず、また時計もない。

この中で、どのようにして私は時間の感覚を得ることができるだろうか。それはひとえに自分の「体内時計」に頼るしかない。だいたいこれくらいで一日二四時間。七回眠ったからおおよそ一週間が経っただろう。もうそろそろ一ヵ月が経過した頃かな。そして……とうとう一年。

もちろん、このような生活が、たとえ［Ⓓ］が足りたとしても、まともに続けられるとは思えないが、これはあくまで思考実験である。

私が三歳のとき、この実験を行って自分の「時間感覚」で「一年」が経過したとしよう。そして私が三〇歳のとき、もう一度この実験を行って「一年」を過ごしたとする。いずれも自分の体内時計が一年を感じた時点が「一年」ということである。それぞれの実験では、実際の物理的な経過時間を外界で計測しておくとする。

さて、ここが大事なポイントである。三歳のときに行った実験の「一年」と三〇歳のときに行った実験の「一年」では、どちらが実際の時間としては長いものになっただろうか。

意外に思われるかもしれないが、Ⓔほぼ間違いなく、三〇歳のときに感じる「一年」のほうが長いはずなのだ。なぜか。

それは私たちの「体内時計」の仕組みに起因する。生物の体内時計の正確な分子メカニズムは未だ完全には解明されていない。しかし、細胞分裂のタイミングや分化プログラムなどの時間経過は、すべてタンパク質の分解と合成のサイクルによってコントロールされていることがわかっている。つまりタンパク質の新陳代謝速度が、体内時計の秒針なのである。

そしてもう一つの厳然たる事実は、私たちの新陳代謝速度が加齢とともに確実に遅くなるということである。つまり体内時計は徐々にゆっくりと回ることになる。

しかし、私たちはずっと同じように生き続けている。そして私たちの内発的な感覚は極めて［Ⓕ］的なものであるために、自己の体内時計の運針が徐々に遅

くなっていることに気がつかない。

だから、完全に外界から遮断(しゃだん)されて自己の体内時計だけに頼って「一年」を計ったとすれば、三歳の時計よりも、三〇歳の時計のほうがゆっくりとしか回らず、その結果「もうそろそろ一年が経ったなあ」と思えるに足るほど時計が回転するのには、より長い物理的時間がかかることになる。つまり三〇歳の体内時計がカウントする一年のほうが長いことになる。

さて、ここから先がさらに重要なポイントである。タンパク質の代謝回転が遅くなり、その結果、一年の感じ方は徐々に長くなっていく。にもかかわらず、実際の物理的な時間はいつでも同じスピードで過ぎていく。

だから？　だからこそ、自分ではまだ一年なんて経っているとは全然思えない、自分としては半年くらいが経過したかなーと思った、そのときには、すでにもう実際の一年が過ぎ去ってしまっているのだ。そして私たちは愕然(がくぜん)とすることになる。

つまり、歳をとると一年が早く過ぎるのは「分母が大きくなるから」ではない。実際の時間の経過に、自分の生命の回転速度がついていけていない。そういうことなのである。

人間は、こうした時間感覚だけでなく、さまざまな錯覚(さっかく)をする。この世にある事物に対して、その実際のありようとは違った感じ方をしてしまうのである。

（福岡伸一『新版　動的平衡』小学館新書）

(1) ——Ⓐ「私たちは時間の経過をどのように把握するのだろうか」に対する作者の考えはどれですか。

ア　太陽や月などの天体の動きによって時間の経過を認識している。
イ　身の回りにある植物の成長によって時間の経過を認識している。
ウ　時計やこよみの正確さを信用して時間の経過を認識している。
エ　睡眠欲(すいみんよく)や食欲などの欲求によって時間の経過を認識している。

(2) ——Ⓑ「モノサシ」とは何を示していますか。

ア　目盛　　イ　基準　　ウ　計算　　エ　測量

(3) ——Ⓒ「時間に対する内発的な感覚」を一語で言いかえた言葉を本文中から書きぬきなさい。

(4) Ⓓ は多くの場合「Ⓓ 住」として「生活のもっとも基本となる条件」を示します。Ⓓ にあてはまる漢字二字を考え答えなさい。

(5) ——Ⓔ「ほぼ間違いなく、三〇歳のときに感じる「一年」のほうが長いはず」なのはなぜですか。「　～　から」に続くように、本文中から二十四字で探し、はじめと終わりの四字を答えなさい。

(6) Ⓕ に入る「自分の立場や見方だけにもとづく考え」の意味になる言葉を考え、漢字二字で答えなさい。

(7) 本文の内容と合っているものを答えなさい。

ア 若いころは相対的にタンパク質の新陳代謝速度が早いが、体内時計で感じる時間経過のスピードも早いので、年齢が低い程（ほど）なにもかも早く感じてしまうものである。

イ 年を重ねるにつれて新陳代謝の速度は遅くなるが、物理的な時間の経過はまったく変わらないので、そこに生じる差が錯覚を生み、実感として時間の経過を早く感じてしまう。

ウ 人生が充実していると時間の経過は早く感じると言われているが、実際の時間の経過は体内時計もふくめてその長さは変わらないので、時間が短く感じるというのはあくまで錯覚である。

エ 三歳の時と三〇歳の時の一年間の長さは物理的には同じ長さであるが、タンパク質の新陳代謝速度の上昇（じょうしょう）が深く関わっているので、感覚的には後者の方が短く感じる。

四　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

＊問題の作成上、一部本文をかえたところがあります。

ホンネと裏腹に［Ⓐ］で謝罪する心理には、保身のために謝罪をするという＊欺瞞的な面とともに、相手の気持ちを傷つけまいとして謝罪する思いやりに溢れる面がある。

日本人がすぐに謝るのは、このうち後者の面が強いのではないか。

自分の立場からしかものごとを見ることができなければ、このような意味での謝罪は行われない。自分の視点を［Ⓑ］しがちな欧米人などは、それぞれに自分だけが正しいと信じ、自分の視点から自分には非がないという自己主張をどこまでもし続けるばかりであるため、激しく対立せざるを得ない。

一方、自分の視点を相対化し、相手の視点に立って見ることができれば、一方的な自己主張はしにくくなる。自分の視点からすれば何の落ち度もないのだが、相手にしてみれば、それは腹が立つし、非常に困るだろうということがわかる。相手の立場に自分を置き換えて、相手の気持ちに共感できてしまう。そうすると、自分の視点からの自己主張を続けるのは利己的でみっともないという感じがする。いかにも大人げなく、恥ずかしい。「共感性が高い」のが、日本文化の大きな特徴のひとつといってよい。「みっともないことを嫌う」のも日本文化の特徴のひとつだ。このような事情によって、日本人はすぐに謝ることになる。

つまり、非を認めて謝る潔さをよしとする美学があり、非を認めて謝る者を責め立てて責任を追及するようなことはしない文化であるために謝りやすいということに加えて、相手の立場への共感性が高いために、すぐに謝るのである。

ここで改めて気がつくのが、どこまでも自分に非がないと主張し続ける欧米人やアラブ人と、すぐに非を認めて謝る日本人とでは、©「非を認める」ことの意味が違うということである。

前者では、非を認めることは、どちらの責任が追及されるべきかを決する「正しさを競う」争いに負けることを意味する。それゆえに、必死の攻防戦の様相を呈する。そこが、日本的感覚をもつ者からすれば、あまりに利己的で見苦しいということになる。

一方、日本人の場合、非を認めることは、その「場」の雰囲気を良好に保つことを意味する。謝罪というものに、責任の追及よりも、面子を立てるという意味合いが大きく伴う日本では、一方が非を認めれば、他方も「まあまあ、そう言わずに」ということで自分にも非があったと表明するなど、思いやりの交流が生じ、「場」の雰囲気が良くなる。そこが、欧米的感覚をもつ者からすれば、Ⓓあまりに論理性がなくわけがわからないということになる。

［Ⓔ］、日本において非を認めるということは、Ⓕ「場」の雰囲気を良くして、事態を無難に収めることであり、真実の追求や責任の糾弾とは切り離されたものなのである。ゆえに、白黒はっきりさせるより、曖昧なまま良好な雰囲気を醸し出すことに力点が置かれる。

このように、どちらの責任かをはっきりさせずに、「お互い様」という落としどころにもっていき、双方の面子を立てながら「場」の雰囲気を良好に保つというのは、言ってみれば個人の責任でなく「場の責任」とする発想である。

だれか個人が悪いというのではなく、その「場」の状況が特定のトラブルを生んだ。ゆえに、悪者探しをして、特定の個人を責め立てたり、責任を追及したりといった［Ⓖ］なことはせず、ものごとを平和に収拾させる。このような発想が背景にあるからこそ、気軽に謝罪することができる。

アメリカなどに行って強い違和感を感じるのは、店側・会社側にミスがあって、クレームを言いに行ったときの対応だ。日本的感覚からすれば、丁重な謝罪があり、気持ちよく適切な対処をしてもらえることを当然のように期待する。ところが、よくある反応は、

「私の担当じゃない」

というものだ。私も、そのような対応をよく受けたものだ。だれでも代行できそうなものなのに、担当者は休みだと言われ、何度も出直したことがある。

日本では、直接の担当者でなくても、何かトラブルが発生し、客からクレームがあった場合には、

「ご迷惑をおかけして、申し訳ありません」

と謝罪するのがふつうだ。自分の担当じゃないから自分は関係ないといった態度をとることは、まず考えられない。この場合は、「私」の責任として謝罪するというのではなく、「弊社」の責任として謝るのだ。日本では、責任は個人に帰せられるのではなく、集団のメンバー全員に分有されているのである。

これは先に述べた、特定の個人でなく「場」に責任を帰するという発想が、日

本文化の中に強く根づいているということと関係する。「場の責任」なのだから、被害者と加害者の間で白黒つけずに、Ⓗ を模索する。それに加えて、加害者側に位置づけられる集団においても、「場の責任」なのだから、その集団のメンバー全員が責任を自覚し、たまたまクレームを受けた人物が直接の担当者に代わって謝罪するということが行われる。

責任を追及せずに、ものごとを穏便に解決する日本的なやり方は、このような「場の責任」という発想のもとに成り立っているのである。

この平和なやり方が、ときに無責任体制につながる。何か事故が起こった場合など、日本的組織の対処能力の低さが指摘され、責任者不在の構造が批判される。そのようなケースを何度も経験しているのに、一向に対処能力の向上が見られない。企業を見ても、政府を見ても、相変わらず責任が曖昧なため、いざというときの即座の対応ができない。海外のメディアが呆れるばかりでなく、日本の多くの一般市民も呆れている。

なぜ改善されないのか。それは、右に示してきたように、個人の責任を追及せず、「場の責任」という発想をもつことで、ものごとを平和に解決することができるといった大きな Ⓘ があるからに他ならない。

ただし、このような「場の責任」の発想は、非常に繊細な問題をはらんでいる。被害者と加害者両者の出会う場を良好なものにするために、双方が相手を思いやり、悪いようにはしないという暗黙の前提の上に成り立つものである。もし、その前提をなおざりにする者が出た場合、責任逃れという形に悪用されるということも起こってくる。

明らかに責任を問われるべき人物が、「場の責任」の発想を楯に責任を逃れ、被害者側がやりきれない思いにさせられるような事態は、そうしたケースの典型といえる。【中略】

「海外ではそうではないのに、日本はおかしい」式の議論が日本ではしばしば見られる。「すみません」に関しても、自分が悪くないのに、やたらと「すみません」を連発するのは日本人ぐらいで、非常に見苦しいなどと言われることがある。そもそもホンネでは自分が悪いと思っていないのに、形だけ「すみません」と謝るのはいやらしいと批判的に評されることもある。

だが、この手の議論は、ここまでに見てきた「すみません」の効用を見過ごしている。「すみません」という言葉は、相手を思いやり、「場」の雰囲気を保つという重要な役割を担っているのである。

＊欺瞞…人をあざむき、だますこと

（榎本博明『「すみません」の国』日本経済新聞出版社）

(1) Ⓐ に入る適切な一語を考え、ひらがなで答えなさい。

(2) Ⓑ に入る語を答えなさい。

ア 絶対化　イ 正常化　ウ 単純化　エ 合理化

(3) ――Ⓒ「「非を認める」ことの意味が違う」とはどういうことですか。

ア 「非を認める」ことが謝罪することと同じである諸外国では、日本のようにその責任が強く求められることがないという違い。

イ 「非を認める」ことが日常の行動となっている日本では、諸外国のように相手を傷つけまいとする気持ちを優先させるという違い。

ウ 「非を認める」ことが個人の責任を明らかにする諸外国に対して、日本では「場」の雰囲気も一緒に明らかにしようとする違い。

エ 「非を認める」ことがすぐに責任追及するとはならない日本に対して、諸外国では自己の正当性の放棄につながるという違い。

(4) ――Ⓓ「あまりに論理性がなくわけがわからない」とはどういうことですか。あてはまるものをすべて選びなさい。

ア　日本人はすべてにおいて責任の所在を明らかにしようとはしないこと。
イ　相手が非を認めれば、最初は認めなかった自分の非を口にすること。
ウ　素直に非を認めないことを欧米人は利己的で見苦しいとすること。
エ　責任の追及よりも面子をたてることが優先され謝罪しないこと。
オ　「場」の雰囲気を重視するあまり責任があいまいになっていること。

(5) Ⓔ に入る語を答えなさい。

ア　しかし　イ　その上　ウ　つまり　エ　また

(6) ――Ⓕ「「場」の雰囲気を良くして、事態を無難に収める」とありますが、これを可能にしていることが説明されている部分をふくむ一文を本文中から探し、はじめの五字を答えなさい。

(7) Ⓖ に入る語を答えなさい。

ア　無関心　イ　無遠慮　ウ　無難　エ　無粋

(8) Ⓗ に入る適切な表現を本文中から十五字で探し、はじめの五字を答えなさい。

(9) Ⓘ に入る、「利点・価値」の意味を持つカタカナ四字の語を答えなさい。

(10) 本文の内容と合っているものを答えなさい。

ア　諸外国の人々にはなかなか理解されないが、日本人は「すみません」という言葉を「場」の雰囲気を良くするために使っており、責任の所在を明らかにするのはすべて見苦しい行為であると見なしている。
イ　日本人がすぐに謝るのは相手の気持ちを傷つけまいとする思いやりであり、何でもかんでも白黒はっきりさせることよりも特定の個人の責任を明らかにしつつ、その場の全員で責任を分有する目的がある。
ウ　日本人は「場の責任」で物事を片付ける傾向があるので、ときに無責任体制で物事が進み、思わぬ事件・事故が起きた場合に被害者・加害者の差がなく平和的な解決が実現できると思われている。
エ　日本人はやたらと「すみません」を連発し、欧米人から批判的に評されることもあるが、それは相手への共感性が高いことに起因するものであり、必ずしも責任逃れの保身が目的ではない。

五　次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

横山弓子は私立の女子校に通う中学三年生。一学期のテストで成績が著しく下がったのだが、それにはある理由があった。しかし、もともと中学受験することを快く思っていなかった父に成績のことを責められ、反動的に家出してしまう。行く当てもなくさまよっていると、今は五年生になった弟太二の一年生の時の担任である水野先生と出会った。

「もう、イヤになっちゃうわよね。わたしはむかしの教員仲間と会って食事をしていたんだけど、みんなと別れて電車に乗ろうとおもったら、架線の点検かなにかで運転を見合わせてるっていうでしょ」

そう言って肩をすくめると、水野先生は自分の住まいは五つ先の駅の近くなのだとおしえてくれた。

「いまさっき、夫に車でむかえにきてくれるようにたのんだんだけど、三、四十分はかかるとおもうのよね。こんなにひとが集まっちゃって、暑いったらありゃしない。誰か音楽でも鳴らさないかしら。そうしたら、お祭りみたいになっておもしろいのに」

もともと陽気な先生だが、それにしてもハイだとおもっていると、弓子は水野先生が少し酔っているのに気づいた。

「あら、バレちゃった。でもだいじょうぶよ、たいして飲んでないから。その証拠に、久しぶりに会うあなたのこともちゃんとわかったでしょ。すっかりきれいになっちゃって。学校はどう？　楽しい？」

水野先生はやさしい笑顔で弓子を見つめた。小学校の職員室で先生方に合格の報告をしたときに、水野先生がことのほかよろこんでくれたのを弓子はおもいだした。

「とても楽しいです。仲のいい友だちも何人かいて」

とっさにとりつくろったものの、弓子はかえって［Ⓐ］。

「誰かと待ちあわせ？　でも、そんな感じでもないみたいね」

このままでは家出をしようとしていることを見ぬかれてしまうとおもったが、逃げだそうにも周囲はひとでいっぱいだった。

立ち話をする中で、水野先生は昨年の運動会の時に、弓子の父に世話になった話をする。

「本当にすてきなおとうさんね。もちろん、おかあさんも」

――そうなのだ。水野先生が言うとおり、おとうさんもおかあさんも本当にすばらしいひとなのだ。それなのに、わたしだけが二人をいらだたせて、悲しませて……。

泣いてはいけないとおもっても、弓子は涙があふれてとまらなくなった。

「あら、たいへん。弓子さん、どうしたの？　わたしがなにかよけいなことを言ったのかしら。すみません、ちょっと通してください。弓子さん、むこうで休みましょう」

脇を支えられて、弓子は水野先生と一緒に駅前のひとごみをぬけだした。

「お店ならすわって話せるけれど、知りあいに聞かれたらこまるわよね？」

水野先生にきかれて、弓子は小さくうなずいた。

「それじゃあ、おうちまで送っていくあいだに、歩きながら話すのはどうかしら。わたしで力になれるなら、いくらでも助けてあげるから」

弓子には、水野先生のもうしでを断るだけの気力もなかった。そして夜道を家へとむかいながら、中学受験をきっかけにして生じた両親との行きちがいを話した。さらに、水野先生にきかれるままに、理数系課目で悪い点数をとったのはわざとであることまでうちあけてしまった。

「もしもし、横山さんのお宅ですか？　夜分にすみません。わたくしは第一小学校で教員をしております水野多美子です。そうです、太二くんが一年生のときに担任をさせていただいた水野です」

携帯電話にむかって話す水野先生は街灯の下にいて、電話には母が出ているよ

うだった。
「じつは、十五分ほどまえに駅前で弓子さんにお会いしましてね。ええ、いままでいろいろお話をうかがっていたところなんです。そうでしたか。では、おとうさまに家にもどられるようにお伝えください。わたくしたちは、もうお宅のすぐまえまで来ております。ええ、角の街灯のところです」
水野先生がそう言ったかとおもうと、すぐに玄関のドアが開いて母が飛びだしてきた。
「先生、もうしわけありません。まずはおはいりになってください。弓子も、ほら」
母は大あわてで水野先生を家にひきいれると、「ちょっとすみません」と断って奥にむかった。父の携帯電話にかけて、はやく家に帰ってくるように言うのだろう。
「弓子さん、トイレをお借りしてもいいかしら」
水野先生を洗面所に案内してから、弓子はダイニングルームのイスにすわった。テーブルのうえはきれいに片づいていたが、キッチンには食べ残されたトンカツや、ごはんがはいったままのお茶碗がおかれていて、自分が出て行ったあとの［Ⓑ］が見えるようだった。

父が家に戻り、水野先生の指示で二階の部屋にいた太二も呼ばれた。

水野先生の指示で、まずは父と母が並んですわった。つづいて両親とむかいあって弓子と太二がすわると、水野先生は長方形のテーブルの短い辺に移動して、立ったまま話しだした。
「時間もないので［Ⓒ］直入にもうしあげますが、わたくしは弓子さんが学習意欲を失った一番の原因はおとうさまにあるとおもいます」
水野先生の指摘が心外だったらしく、父が眉間にしわをよせた。
「先生、おことばですがⒹ……」と母が口を開こうとすると、水野先生がそれをさえぎった。
「いけませんよ、おかあさま。ご主人の考えが正しいとおおもいなら、そんなときこそ、どんなヘリクツをこねてでもいいから、お子さんの味方になってあげるのが母親の役目ってものじゃありませんか」
母をいさめると、水野先生はふたたび父にむかって話しかけた。
「勝手な推測で恐縮なんですが、おとうさまは中学から私立の学校に通うことに対して偏見をお持ちなのではありませんか？」
それは弓子もかねてよりおもってきたことだった。図星だったらしく、父は水野先生に反論しなかった。
「お嬢様学校と世間では呼ばれていても、そこが本当はどういうところなのかを見きわめようとする努力が、あまりに足りなかったのではないでしょうか？小学校での、おとうさまの熱意あふれるふるまいをよくよくぞんじあげているだけに、弓子さんのお話を聞いて残念でなりませんでした。学園祭にも、体育祭にも、一度も行かれていないそうですが、としごろの女の子なら、父親に来てもらいたくないとおもうのは当たりまえですよね。どうしてそこを明るく朗らかにおしきれなかったのか、わたくしにはわかりません」
父はなにか言いたそうだったが、的確な反論をおもいつかないようだった。
「たしかに授業料や入学金はよその学校よりも高いし、なかには〝お嬢様〟を地で行くような裕福なご家庭の娘さんもいらっしゃいますけれど、あの学校の先生方は実に芯の強い立派な方々ばかりなんですよ」
水野先生は父と母を交互に見つめながら、さらに話をつづけた。
「ご両親から支持されていないとおもったら、子どもが自分の力を伸ばせるわけがないじゃありませんか。まして、これまでとはちがう環境にひとりで飛びこんでいるんです。わざわざ高い授業料を払っているのに、Ⓔ弓子さんの足をひっぱるような態度をとるのはなぜなんですか？」
弓子は、父がこんなにもやりこめられているところをはじめて見た。しかし、だからといって、自分がテストでわざと悪い点数をとったことが正当化されたとはおもっていなかった。たしかに両親から認められていないのは苦しかったが、弓子も地元の公立中学校に対して偏見を持っていたのだから、水野先生のように父だけを一方的に責める気にはなれなかった。
「わたくしがもうしあげたことについて、おとうさまはどうおもわれますか？」
父はじっと考えこんでしまい、すぐには返事ができないようだった。
「ところで、わたくしがどうしてこんなにも弓子さんの肩を持つのか、ふしぎに

おもわれませんか?」

それまでのⒻ問いつめる口調から一転して、水野先生が楽しそうな声で言った。

「それは、Ⓖわたくしが弓子さんの先輩だからです。はるか四十数年まえに、わたくしもあの清楚を絵に描いたようなセーラー服を着て毎朝賛美歌をうたい、神様に祈りをささげていたんですもの。われらが学び舎を低く見られて黙っていられるわけがないじゃありませんか」

まさか、そんなこととは夢にもおもっていなかったので、弓子は声が出なかった。

「弓子さん、Ⓗ居心地が悪いだなんてとんでもない。先生方に全力でぶつかってごらんなさい。かならず本気でこたえてくれますから。そうするうちに、あなたは母校というものがひとりの人間にとっていかに大切な場所なのかを、身をもって理解するのです。さあ、これからあなたが切りひらく輝かしい未来とわれらが学び舎の永久の繁栄を願って、校歌をうたいましょう!」

そう言うと水野先生が右手をふったので、弓子は背筋を伸ばして歌いだした。初めの一、二小節は父や母や太二の目が気になって口がひらかなかったが、校歌を歌うよろこびのほうがまさった。水野先生が低音のパートをうけもってくれて、弓子は澄んだ声で高らかに歌いつづけた。

「いやあ、まいった。いい歌が聴けたのは良かったが、ここまで圧倒されたのは初めてだ」

水野先生のご主人が運転する車が遠ざかると、父がそう言って両腕を伸ばした。

「三泊四日の［Ⓘ］での出張よりも、うちに帰ってきてからの二時間のほうがしんどかった」

「おとうさん、お風呂がまだですけど、はいりますか?」

母にきかれて、「ああ、そうだったな」と父がつぶやいた。

「しかし、水野先生が弓子の学校の先輩だったとはな。ひとは見かけによらないなんて言うと、飛んで帰ってきてしかられそうだな」

そこでⒿ父の顔が自然にほころび、弓子もホッと息をついた。

「おとうさん、おかえりなさい」

いきなり言ったので、「なんだ、どうした」と父にけげんな顔をされた。

「さっき、出張から帰ってきたときに言わなかったから」

弓子が言うと、父が合点してうなずいた。

「おう、ただいま。そして、弓子にも、おかえりなさいだ。電車が動いていなくて、本当によかったな」

そこで父はふとおもいついたという顔で、「よし。明日、みんなで散歩に行こう」と言った。

「そうね、そうしましょう」

母が応じて、太二もうれしそうにしている。久しぶりに家族四人で土手を歩けるのだとおもうと、弓子はみるみるからだに力がわいてきた。

――もっと勉強がしたい。もっと、もっと、勉強がしたい。

胸のうちで唱えながら、弓子は明日を待ち遠しくおもった。

（佐川光晴『大きくなる日』集英社）

(1) ［Ⓐ］に入る語を答えなさい。

ア　言いそびれた　イ　ふっ切れた　ウ　悲しくなった　エ　いらだった

(2) ［Ⓑ］に入る語を答えなさい。

ア　混乱ぶり　イ　激高ぶり　ウ　急変ぶり　エ　失望ぶり

(3) Ⓒ を含む傍線部は、「前置きをぬきにして問題の要点に入ること」という意味です。漢字二字を入れ四字熟語を完成させなさい。

(4) ――Ⓓ「……」にはどのような意味の言葉が続くと考えられますか。
ア　夫の至らなさを認めつつも、娘を見放す言葉。
イ　娘の非行を責めつつも、その無事を喜ぶ言葉。
ウ　自分の未熟さを反省しつつ、娘をかばう言葉。
エ　先生へ感謝しつつ、夫の言動を弁解する言葉。

(5) ――Ⓔ「弓子さんの足をひっぱるような態度」の具体的な内容を、本文中から二十二字で探し、はじめの五字を答えなさい。

(6) ――Ⓕ「問いつめる口調」とありますが、水野先生は「問いつめる口調」の中でも弓子の父を傷つけないよう話を進めています。先生のその配慮がわかる部分を指摘しつつ、先生が父に一番伝えたかったことを四十五字以上五十五字以内で答えなさい。

(7) ――Ⓖ「わたくしが弓子さんの先輩だからです」とありますが、それが暗示されている部分は本文中に何度か出てきます。その中で一番はじめに書かれている一文を探し、はじめの五字を答えなさい。

(8) ――Ⓗ「居心地が悪い」とありますが、弓子はそう口にする一方で内心では自分の学校に愛着を感じています。そのことがわかる部分を本文中から九字で書きぬきなさい。

(9) Ⓘ には、「無理な日程で物事を進めること」の意味の漢字三字の熟語が入ります。次の漢字を組み合わせて、その熟語を完成させなさい。

軍　強　雪　飛　行

(10) ――Ⓙ「父の顔が自然にほころび、弓子もホッと息をついた」とありますが、この時の父と弓子の気持ちを答えなさい。
ア　水野先生が帰り一安心の父だったが弓子の気持ちがわからず不安をかかえる一方で、弓子は水野先生が自分のことを両親にしっかりと話してくれてうれしく思う気持ち。
イ　思いがけない水野先生の登場で緊張した父だったが少しずつにその緊張もほぐれる一方で、弓子は両親の誤解が何とかうすれてこれからの生活を楽観する気持ち。
ウ　出張のつかれもなくなるほどの出来事にとまどう父だったが何とかやり過ごし軽口を言う一方で、弓子はその発言を流しながら父の真意をさぐりつつ落胆する気持ち。
エ　娘に対する自分の不徳を感じる父だったが今までのわだかまりが解けて安心する一方で、弓子は自分の持っていた偏見も認めて父に対し素直になろうとする気持ち。